

箱崎キャンパス内で石積み遺構の延長を確認
—元寇防塁の立地と構造の解明にむけて—

本学埋蔵文化財調査室は、九州大学統合移転事業にともなう箱崎キャンパス埋蔵文化財発掘調査の一環として、旧理学部跡地中庭で発掘調査を実施し、箱崎の元寇防塁の立地と構造を解明するために重要な手がかりを得ました。今回は、中央図書館の南側で昨年発見された元寇防塁とみられる石積み遺構から南に約 60m の地点に、その続きが 5m 以上残ることが確認されました。石積みは南北に 80m 以上、直線的に延びることになります。

調査の結果、石積みは、海側にむかってゆるやかに傾斜する浜堤の上に造られていました。当時の汀線も再現できました。浜堤上に造られた石積みの前に浜辺がひろがり汀線にいたる、元寇防塁築造時の景観を捉えることができました。これは、博多湾沿岸の遺跡で初の事例です。

石積みの後方は、砂を盛り、陸側にむかってゆるやかに傾斜させています。元寇防塁築造後に修理・増築された「裏加佐」とよばれる、上に登りやすくするための整地部分とみられます。また、傾斜面のすぐ後方には、溝状遺構があります。箱崎の元寇防塁は、築造後しばらくのあいだ、異国警固のために修理されます。この溝は、元寇防塁の裏加佐を修理する際に掘り返されたと考えられ、薩摩国の管理方法をよく示しています。鎌倉時代末になると、防塁は放棄されます。溝に埋まる 14 世紀代を中心とする陶磁器・土器・土錘・銭貨などは、その後の周辺住人たちの生活の様子を知らせています。

【発掘調査地点】



【発見された石積み遺構】



【防塁が上に造られた浜堤】

